

行為プロセスとの関係性から〈同意〉の種類を区別する

須田 悠基 (Yuki Suda)

所属 東洋大学

同意 **consent** は、通常であれば他者への権利侵害となるため許されないような行為を、許容可能なものへと変える機能を持つとされる (Guerrero, 2021)。たとえば、他者の所有物を使用するなどの普通は許されない行為が、相手の同意により許容可能なものとなりうる。この機能から分かるように、同意は、他者の特定の〈行為〉を対象になされるものである。そして、行為の多くは、始点から終点までの時間的幅を持ち、また、複数の異なるプロセスによって実行されうる、という特徴を持つ。たとえば、〈東京から大阪に行く〉という行為は、東京から出発して目的地の大阪に到着するまでの間の時間的幅を持ち、かつ、この行為は、〈飛行機に乗る〉とか〈新幹線に乗る〉といった複数のプロセスにより実行可能である。同意の対象はこのように特定のプロセスで実行される行為なので、同意自体も、行為のプロセスに関する内容を含みこんだものとなることがしばしばある。たとえば、あるタイプの行為 A 自体には同意しつつも、特定のプロセスによって A が実行されることには同意する用意がない——大阪観光に行くことには同意したが、大阪まで飛行機を使って移動することには同意しない——などの形で、A の実行プロセスに関する条件が同意内容に盛り込まれる、といったことがある (Chadha, 2021)。

以上のようなことから、同意の内容や成立条件などを記述的に整理したり、望ましい同意のあり方を規範的に提案したりする上では、同意対象となる行為の実行プロセスに目を向けたきめ細かい検討が必要となる。そのため、本発表では、行為プロセスと同意の関係性に焦点を当てる仕方で、こうした点を検討していく。その際、具体的に以下のような事例を取り上げる予定である。

- (a) 行為が特定のプロセスで実際に実行された後で、はじめて同意の成立条件が満たされることとなるような同意。
- (b) 同意時点では、どのような具体的プロセスをたどることとなるかが十分に明らかでない行為への同意。
- (c) 実行プロセスを同意主体がトラックできない行為への同意。

(a)の標準的な例は、特定の条件が付いた同意である。たとえば、〈車を借りる〉という行為への同意の条件として、借りたときの状態を保ったまま返却することが課されている場合、この同意条件が満たされるか否かは、行為プロセスが終了する時点まで確定しない。(b)の例としては、行為の目的等は定まっているが、どのようなプロセスで実行するかは未確定な行為への同意などがある。そして、(c)の例としては、同意主体の意識がない状態でなされる手術への同意などが考えられる。

これらの同意にはそれぞれ特有の問題が生じる。たとえば、(a)には、同意の成立時点をどのタイミングと捉えるべきかという問題が生じる可能性があるし、(b)には、同意主体が同意時点で予想していなかった仕方で行為プロセスが進んでいくリスクなどがある。さらに、プロセスをトラックできる行為とは違い、(c)の同意については、行為の進行途中で同意主体が同意の撤回意思を告げることが難しいなどの問題がある。

本発表では、行為プロセスとのこうした関係性ごとに、同意の種類を分類整理する。その上で、どのようなプロセスでなされる行為に対して、どのような同意手法が望ましいか／採用可能かを検討していく。その過程で、同意の〈バックアップモデル〉と〈更新モデル〉という二つの同意手法を提案し、同意対象の行為プロセスが持つ特徴に応じてこの二つの手法を使い分けるべきだと示す予定である。

参考文献

Chadha, K. (2021). "Conditional Consent," *Law and Philosophy* 40(3): 335-359.

Guerrero, A. (2021). "The Epistemology of Consent," In J. Lackey(ed.), *Applied Epistemology*. Oxford: OUP.